

【参考2】

2022年～2023年シーズンにおける
高病原性鳥インフルエンザの発生事例の詳細

1) 岡山県 1 例目 (倉敷市) の事例	1
2) 北海道 1 例目 (厚真町) の事例	4
3) 香川県 1 例目 (観音寺市) の事例	8
4) 茨城県 1 例目 (かすみがうら市) の事例	12
5) 岡山県 2 例目 (倉敷市) の事例	16
6) 北海道 2 例目 (伊達市) の事例	21
7) 岡山県 3 例目 (倉敷市) の事例	25
8) 和歌山県 1 例目 (白浜町) の事例	28
9) 兵庫県 1 例目 (たつの市) の事例	31
10) 鹿児島県 1 例目 (出水市) の事例	35
11) 新潟県 1 例目 (阿賀町) の事例	39
12) 宮崎県 1 例目 (新富町) の事例	44
13) 青森県 1 例目 (横浜町) の事例	48
14) 香川県 2 例目 (観音寺市) の事例	53
15) 香川県 3 例目 (観音寺市) の事例	57
16) 宮城県 1 例目 (気仙沼市) の事例	60
17) 鹿児島県 2 例目 (出水市) の事例	64
18) 千葉県 1 例目 (香取市) の事例	67
19) 鹿児島県 3 例目 (出水市) の事例	71
20) 福島県 1 例目 (伊達市) の事例	75
21) 和歌山県 2 例目 (和歌山市) の事例	79
22) 鳥取県 1 例目 (鳥取市) の事例	84
23) 鹿児島県 4 例目 (出水市) の事例	88
24) 鹿児島県 5 例目 (出水市) の事例	91
25) 愛知県 1 例目 (豊橋市) の事例	95
26) 佐賀県 1 例目 (武雄市) の事例	99
27) 鹿児島県 6 例目 (出水市) の事例	103
28) 福島県 2 例目 (飯舘村) の事例	107
29) 山形県 1 例目 (鶴岡市) の事例	110
30) 鹿児島県 7 例目 (出水市) の事例	114
31) 愛知県 2 例目 (豊橋市) の事例	117
32) 鹿児島県 8 例目 (出水市) の事例	121
33) 香川県 4 例目 (三豊市) の事例	125
34) 鹿児島県 9 例目 (出水市) の事例	128
35) 青森県 2 例目 (三沢市) の事例	132
36) 広島県 1 例目 (世羅町) の事例	137
37) 沖縄県 1 例目 (金武町) の事例	141
38) 埼玉県 1 例目 (深谷市) の事例	146

39) 鹿児島県 10 例目 (南九州市) の事例	150
40) 福岡県 1 例目 (糸島市) の事例	154
41) 鹿児島県 11 例目 (阿久根市) の事例	158
42) 広島県 2 例目 (世羅郡世羅町) の事例	162
43) 岡山県 4 例目 (美咲町) の事例	166
44) 宮崎県 2 例目 (日向市) の事例	170
45) 鹿児島県 12 例目 (阿久根市) の事例	173
46) 長崎県 1 例目 (佐世保市) の事例	176
47) 茨城県 2 例目 (笠間市) の事例	180
48) 福岡県 2 例目 (糸島市) の事例	184
49) 広島県 3 例目 (世羅町) の事例	188
50) 埼玉県 2 例目 (狭山市) の事例	192
51) 広島県 4 例目 (世羅町) の事例	196
52) 群馬県 1 例目 (前橋市) の事例	201
53) 千葉県 2 例目 (旭市) の事例	204
54) 福岡県 3 例目 (古賀市) の事例	208
55) 新潟県 2 例目 (村上市) の事例	211
56) 茨城県 3 例目 (城里町) の事例	216
57) 宮崎県 3 例目 (川南町) の事例	220
58) 広島県 5 例目 (三次市) の事例	224
59) 新潟県 3 例目 (上越市) の事例	228
60) 大分県 1 例目 (佐伯市) の事例	232
61) 滋賀県 1 例目 (大津市) の事例	237
62) 群馬県 2 例目 (前橋市) の事例	241
63) 広島県 6 例目 (世羅町) の事例	246
64) 千葉県 3 例目 (匝瑳市) の事例	250
65) 埼玉県 3 例目 (行田市) の事例	254
66) 滋賀県 2 例目 (大津市) の事例	258
67) 群馬県 3 例目 (前橋市) の事例	261
68) 千葉県 4 例目 (匝瑳市) の事例	266
69) 宮城県 2 例目 (角田市) の事例	270
70) 千葉県 5 例目 (匝瑳市) の事例	274
71) 埼玉県 4 例目 (日高市) の事例	278
72) 茨城県 4 例目 (かすみがうら市) の事例	282
73) 茨城県 5 例目 (八千代市) の事例	286
74) 鹿児島県 13 例目 (鹿屋市) の事例	290
75) 千葉県 6 例目 (横芝光町) の事例	294
76) 茨城県 6 例目 (坂東市) の事例	299

77) 福岡県 4 例目 (福岡市) の事例	303
78) 新潟県 4 例目 (胎内市) の事例	307
79) 新潟県 5 例目 (胎内市) の事例	312
80) 岩手県 1 例目 (金ヶ崎町) の事例	317
81) 青森県 3 例目 (蓬田村) の事例	321
82) 北海道 3 例目 (千歳市) の事例	325
83) 北海道 4 例目 (千歳市) の事例	329
84) 北海道 5 例目 (千歳市) の事例	334

1. 岡山県 1 例目（倉敷市）の事例

(1) 概要

① 所在地

岡山県倉敷市

② 飼養状況

採卵鶏 約 17 万羽

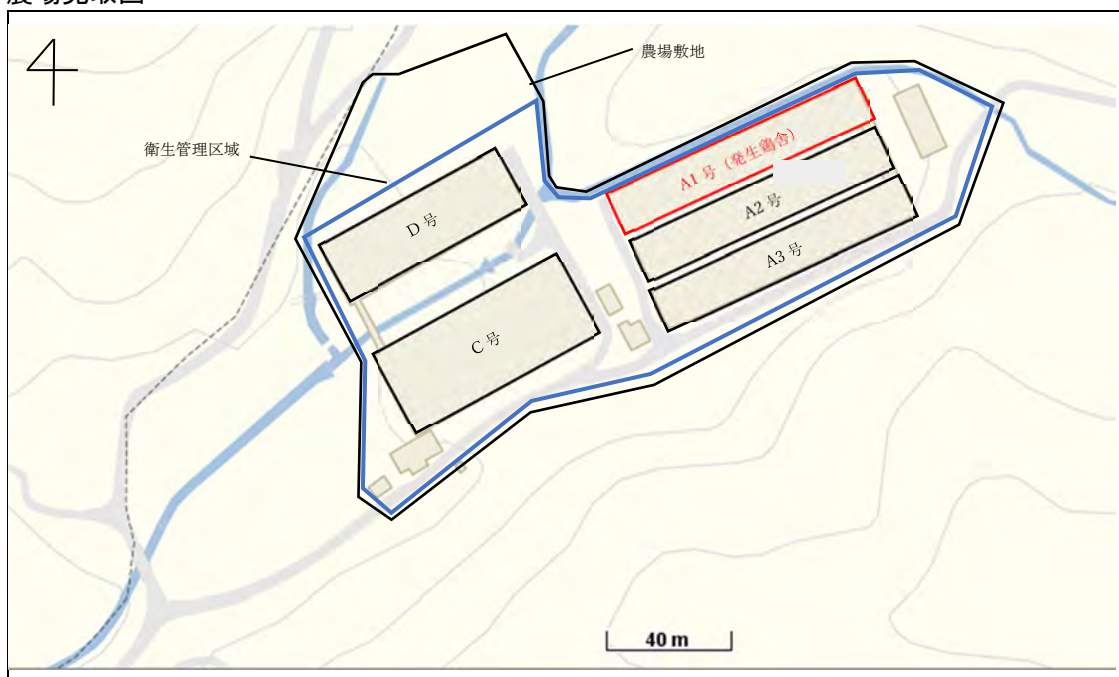
鶏舎	飼養羽数	日齢
A 1 号舎<発生鶏舎>	39,384 羽	557 日齢
A 2 号舎	39,580 羽	529 日齢
A 3 号舎	39,954 羽	498 日齢
C 号舎	29,766 羽	192 日齢
D 号舎	20,324 羽	228 日齢

(令和 4 年 10 月 28 日現在)

③ 発生確認日

令和 4 年 10 月 28 日

④ 農場見取図



(2) 現地疫学調査実施年月日

令和 4 年 10 月 28 日

(3) 農場の周辺環境・農場概況

- ① 当該農場は山間の谷沿いに位置し、周囲はシイ類や落葉広葉樹林及び竹林に囲まれ、農場周辺には複数のため池や農場を縦断する沢が存在した。
- ② 当該農場から約 350m のため池にはヒドリガモ約 240 羽、オシドリ約 50 羽ほか合計 6 種約 300 羽のカモ類の生息が確認された。また水際には小型哺乳類の糞も認められた。

(4) 通報までの経緯・発生時の状況

- ① 飼養管理者によると、発生鶏舎（通報時 556 日齢）の 10 月 25 日以前の過去 1 週間の 1 日あたりの死亡鶏は 10~15 羽程度で推移していたとのこと。
 - ② 発生鶏舎は 2 階建てのセミウインドレス鶏舎で、26 日に 35 羽が鶏舎 2 階の一部のエリアに集中して死亡していたが、当該エリアで給水機の不調が認められたため機械を修理して様子を見たとのこと。その後、27 日朝の見回り時には、当該エリア及びその直下の 1 階で合計 95 羽が死亡していたため家畜保健衛生所に通報したとのこと。その後、家畜防疫員立入時にさらに 70 羽の死亡を確認した。
 - ③ 疫学調査時においても、通報時と同一の場所付近、通路を挟んだ向かいのケージにおいて死亡鶏や衰弱した鶏が多数確認された他、死亡鶏の多いエリアでは軟卵が認められた。発生鶏舎以外の鶏舎では異常は認められなかった。
- (5) 管理者及び従業員
- ① 当該農場では社員 4 名とパートの 3 名の計 7 名の従業員が勤務しており、鶏舎内における飼養管理作業やたい肥運搬は社員が担当し、集卵作業を社員及びパート職員が実施しているとのこと。
 - ② 飼養管理者は鶏舎ごとに担当者を決めているが、状況により担当の鶏舎以外の作業を実施することもあるとのこと。
- (6) 農場の飼養衛生管理
- ① 飼養管理者によると、車両が農場に入る際は、農場入口に設置されたゲート式の車両消毒装置で車両消毒を実施しているとのこと。
 - ② 従業員は出勤時、衛生管理区域外に自家用車を駐車し、徒歩又は農場内用の車両に乗り換えて衛生管理区域内に入り、事務所で農場内専用作業着、長靴を着用し、手指消毒を実施するとのこと。従業員以外は、車両消毒後に衛生管理区域境界部で、農場内専用の長靴と上着を着用し、手指消毒を実施しているとのこと。
 - ③ 鶏舎はセミウインドレス鶏舎 3 棟、開放鶏舎 2 棟で、いずれの鶏舎も全ての窓に金網が設置されていた。
 - ④ 鶏舎に入る際は踏み込み消毒と手指消毒を実施し、前室に設置されているすのこの上で鶏舎内専用の長靴に履き替え、鶏舎内作業用の軍手を着用して作業しているが、軍手を着用したまま鶏舎外に出ることがあるとのこと。
 - ⑤ 鶏舎単位で同一日齢の鶏が飼養されており、通報時点では農場内は 5 ロットに分かれており、191 日齢~556 日齢の鶏が飼養されていた。
 - ⑥ 鶏舎ごとにオールイン・オールアウトを行っており、オールアウト後は除糞、鶏舎の洗浄消毒を実施し、2 週間程度空舎期間を設けているとのこと。
 - ⑦ 飼料タンク上部には蓋が設置されており、鶏舎内のラインを通して自動で給餌出来る構造となっていた。
 - ⑧ 飼養鶏への給与水は井戸水を塩素消毒してから用いているとのこと。
 - ⑨ 鶏糞は、セミウインドレス鶏舎からベルトコンベアで鶏舎横の集積場に運搬され、ほぼ毎日の頻度で自社トラックにより堆肥処理施設へ搬出していた。
 - ⑩ 飼養管理者によると、死亡鶏は毎朝の健康観察時に回収し、農場内で毎日焼却し、焼却灰は鶏糞とともに堆肥処理施設へ搬出しているとのこと。
- (7) 野鳥・野生動物対策
- ① 飼養管理者によると、農場周辺において時折イノシシ、タヌキ、ネコ等の野生動物やカラスを目撃することがあるとのこと。
 - ② 鶏卵を搬出するバーコンベアの鶏舎外への開口部には、シャッター等の遮蔽は設置されていなかった。
 - ③ 飼養管理者によると、コンベアの鶏舎出入口等ネズミの侵入経路となりうる箇所に殺鼠剤

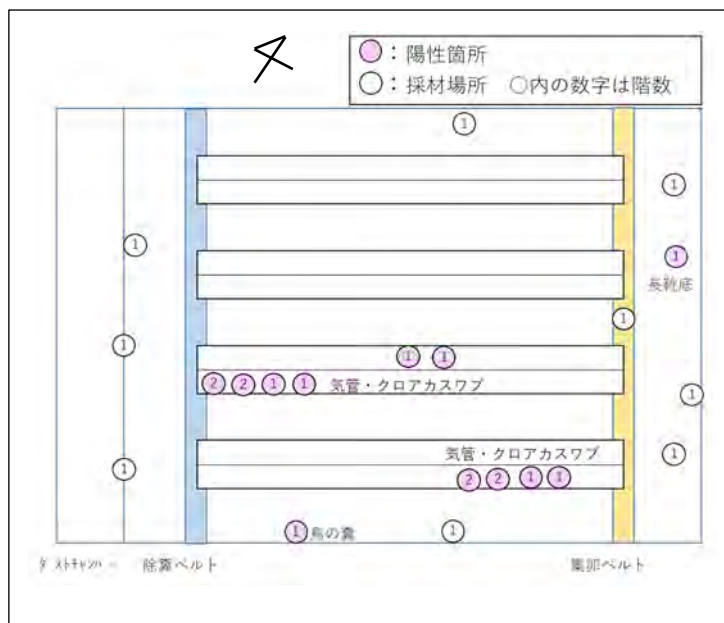
及び粘着シートを設置しており、まれにネズミがかかることがあるとのこと。

(8) 環境サンプル

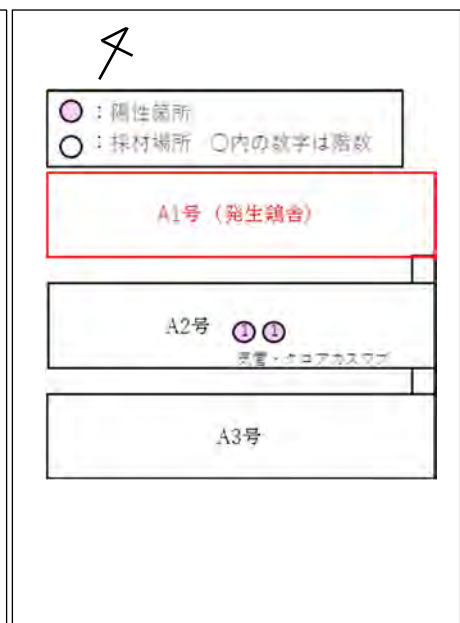
環境検査材料リスト (下線部はウイルスが検出された検体)

採材場所	採取したサンプル
発生鶏舎 (A 1 号舎)	前室床、長靴底、作業用手袋、壁、集卵ベルト、換気扇、 <u>気管・クロアカスワブ(死鳥)</u> 、 <u>鳥の糞</u> 、 <u>鳥の死骸</u>
未発生舎 (2号舎)	<u>気管・クロアカスワブ (死鳥)</u>
農場外	ため池の水

【発生鶏舎採材場の見取り図】



【発生鶏舎以外の採材場所】



2. 北海道1例目（厚真町）の事例

（1）概要

① 所在地

北海道厚真町

② 飼養状況

肉用鶏 約17万羽

鶏舎	飼養羽数	日齢
1号	8,922羽	42日齢
2号	8,902羽	42日齢
3号	9,515羽	41日齢
4号 <発生鶏舎>	9,204羽	41日齢
5号	9,252羽	41日齢
6号	9,520羽	41日齢
7号	9,431羽	39日齢
8号	7,137羽	39日齢
9号	9,665羽	39日齢
10号	9,432羽	39日齢
11号	8,890羽	38日齢
12号	9,772羽	38日齢
13号	9,590羽	38日齢
14号	9,496羽	38日齢
15号	9,327羽	38日齢
16号	9,497羽	37日齢
17号	7,166羽	37日齢
18号	8,756羽	37日齢

（令和4年10月28日現在）

③ 発生確認日

令和4年10月28日

④ 農場見取図



(2) 現地疫学調査実施年月日

令和4年10月28日

(3) 農場の周辺環境・農場概況

- ① 当該農場は平野部に位置し、周囲を林に囲まれていた。
- ② 調査時、農場から約0.9km離れているため池には、コガモ35羽、マガモ19羽、約1.5kmの池にはオオハクチョウ79羽等のカモ類やハクチョウ類が確認された。
- ③ 農場の衛生管理区域内には沈殿池が存在していたが、忌避テープが張られており野鳥の痕跡のない状態だった。
- ④ 当該農場はセミウインドレス鶏舎18棟からなり、発生時は全棟で肉用鶏が飼養されていた。

(4) 通報までの経緯・発生時の状況

- ① 農場によると、発生鶏舎（通報時40日齢）では10月26日までは1日当たりの死亡鶏は数羽～10羽程度であったが、10月27日朝に50羽死亡したことから、管理獣医師に連絡したとのこと。当該獣医師が立ち入った際に、発生鶏舎の死亡鶏の解剖検査を実施したところ、脾臓、臍臓の腫脹、腹水の増加、皮下出血等が確認され、その後27日昼までに20羽死亡したことから、家畜保健衛生所に通報したとのこと。
- ② 発生鶏舎は農場の東側のほぼ中央に位置していた。死亡鶏は鶏舎内の後方エリアに散在していたとのこと。
- ③ 疫学調査時には、発生鶏舎全体で死亡鶏が散在していた。発生鶏舎以外の鶏舎では特筆すべき異常は認められなかった。

(5) 管理者及び従業員

- ① 当該農場では、農場専属の飼養管理者2名が飼養管理等を行う他、系列会社の飼養管理部門の担当社員1名が日常的に来場し、鶏舎内の状況を確認しているとのこと。
- ② 担当社員は1名で系列農場2か所を担当しており、1日に2農場へ立ち入ることがあったが、立入り時にはシャワーイン・シャワーアウトを行っていたとのこと。

- ③ 飼養管理者は鶏舎ごとの担当分けはしていないとのこと。

(6) 農場の飼養衛生管理

- ① 農場によると、車両が農場に入る際は、農場入口に設置された動力噴霧器で車両消毒を実施しているとのこと。
- ② 農場によると、飼養管理者、担当社員及び鶏舎に立ち入る外来者は、農場に入る際、シャワーを浴びた上で農場専用の作業着、長靴に交換し、手袋を着用していたとのこと。
- ③ 各鶏舎に入る際は、鶏舎入口に置いた消石灰を入れた消毒槽内で鶏舎外作業用の長靴を脱いで鶏舎内においた専用の長靴に履き替え、各自が携帯している消毒スプレーで手指を消毒していた。
- ④ 鶏舎に立ち入らない外来者は、農場内専用の作業着、長靴に交換していたとのこと。
- ⑤ 鶏舎は、壁面上部に吸気口があり、開閉用の蓋と網目が約2cmの金網が設置されていた。開閉用の蓋は、コンピュータ制御により自動で開閉するとのこと。また、壁面下部にも吸気用の開口部があり、人力で開閉可能なパネルと、網目が約2.5cmの金網が設置されていた。発生鶏舎のパネルは全て閉鎖されていた。
- ⑥ 鶏舎天井には排気ファンが設置されており、防鳥ネット等は設置されていなかったが、通常は常時稼働していたことから、野生動物の侵入は困難と考えられた。
- ⑦ 鶏舎横の飼料タンク上部には蓋が設置されており、全ての鶏舎で鶏舎内のラインを通じて自動給餌を行っていた。
- ⑧ 飼養鶏への給与水は井戸水を利用しており、ろ過した上で塩素消毒を実施していたとのこと。
- ⑨ 通常、数日かけてオールイン・オールアウトを行っており、オールアウト後は5日程度かけて鶏舎内の除糞と清掃・消毒を行い、その後の空舎期間を5日程度設けていたとのこと。
- ⑩ 直近のオールアウト及び鶏糞の運び出しは1か月以上前だったとのこと。
- ⑪ 死亡鶏は毎日の健康観察時に回収し、農場内専用車両で農場入口のすぐ外側にある蓋付きの容器に保管していた。容器内の死体は、自社運送車で輸送しており、最後の回収は10月27日であったとのこと。
- ⑫ 重機や器材などの他農場との共用はなかったとのこと。

(7) 野鳥・野生動物対策

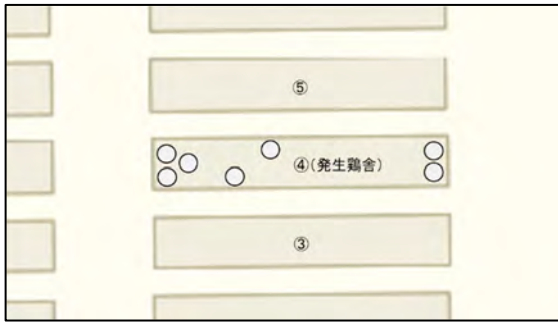
- ① 農場内では野生動物はほとんど見かけず、野鳥ではカラスを見るほか、まれにシカ、リスを見たことがあるとのこと。調査時には、農場敷地内で中型哺乳類のものと思われる糞及び足跡、農場敷地上空でカラス及びトビが確認された。
- ② 鶏舎内ではネズミを見かけることはないが、まれにハツカネズミと思われるネズミが罠にかかることはあったとのこと。調査時には、発生鶏舎内では明確なラットサインは認められなかった。
- ③ ネズミ対策として鶏舎前室に粘着シートを設置していたとのこと。

(8) 環境サンプル

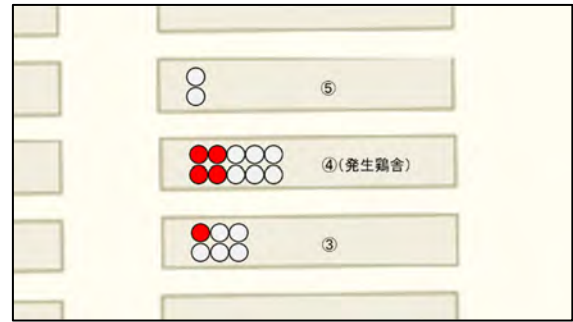
環境検査材料リスト（下線部はウイルスが検出された検体）

採材場所	採取したサンプル
発生鶏舎（鶏舎④）	前室床、前室長靴底、壁面、排気ファン 死鳥気管スワブ（ <u>2羽陽性</u> ・3羽陰性） 死鳥クロアカスワブ（ <u>2羽陽性</u> ・3羽陰性）
未発生舎（鶏舎③）	死鳥気管スワブ（1羽陽性・2羽陰性） 死鳥クロアカスワブ（3羽陰性）
未発生舎（鶏舎⑤）	死鳥気管スワブ（1羽陰性） 死鳥クロアカスワブ（1羽陰性）

○環境材料（前室床、長靴底、壁面等）



○気管スワブ（上段）・クロアカスワブ（下段）



○：採材場所

●：陽性場所

3. 香川県 1 例目（観音寺市）の事例

(1) 概要

① 所在地

香川県観音寺市

② 飼養状況

採卵鶏 約 4 万羽

鶏舎	飼養羽数	日齢
3号舎（成鶏舎）＜発生鶏舎＞	約 10,500 羽	523 日齢
1号舎（成鶏舎）	約 7,500 羽	404 日齢
2-1号舎（成鶏舎）	約 11,000 羽	161 日齢
2-2号舎（成鶏舎）	約 11,000 羽	616 日齢
5号舎（大雛舎）（空舎）	—	—
6号舎（大雛舎）（空舎）	—	—
7号舎（育成舎）（空舎）	—	—

（令和 4 年 11 月 1 日現在）

③ 発生確認日

令和 4 年 11 月 1 日

④ 農場見取図



(2) 現地疫学調査実施年月日

令和 4 年 11 月 1 日

(3) 農場の周辺環境・農場概況

- ① 当該農場は山の辺縁部分にあたる平野に位置し、農場周辺には複数のため池や田畑が存在した。また、鶏舎間を横切るように国道が通っており、交通量も多かった。
- ② 発生鶏舎はため池に隣接しており、当該ため池にはカモ類（カルガモ 54 羽、ヒドリガモ 13 羽、ハシビロガモ 8 羽）のほか、オオバン 11 羽等の生息が確認された。そのほかの農場周辺のため池では、ホシハジロが多く確認された。カモ類が全く確認されなかったため池もあり、発生鶏舎周辺のため池におけるカモ類の種構成について共通した傾向は見られ

なかった。

(4) 通報までの経緯・発生時の状況

- ① 飼養管理者によると、過去1週間の1日当たりの死亡鶏は全鶏舎合わせて1～5羽程度で推移していたとのこと。
- ② 発生鶏舎は高床式の開放鶏舎で、採卵鶏（通報時560日齢）が4段ケージで飼養されていた。前日まで特段の異常がなかったところ、10月31日朝の健康観察時に50羽が死亡しているのを発見したため、家畜保健衛生所に通報したとのこと。死亡は鶏舎の入口に対して奥側（ため池側）で見られ、特に上段に多かったとのこと。
- ③ 疫学調査時も、通報時と同様に奥側の複数列で死亡や沈鬱、チアノーゼ等の症状を示す鶏が多数確認された。発生鶏舎以外の鶏舎では異常は認められなかった。

(5) 管理者及び従業員

- ① 当該農場では社員4名とパート職員2名の計6名の従業員が勤務しており、このうち飼養管理は社員4名が担当していた。パート職員2名は集卵作業のみ担当していた。
- ② 各従業員は基本的に担当する鶏舎が決まっているとのこと。

(6) 農場の飼養衛生管理

- ① 農場（各鶏舎）の出入口に消毒ゲートはなく、隣接する道路や田畑と農場の境界に柵等の物理的な障壁は設置されていなかった。
- ② 来場車両が農場に入る際は、衛生管理区域外の倉庫に設置された動力噴霧器により車両消毒を実施した後、公道を通過して各鶏舎に移動していたとのこと。従業員が鶏舎間や堆肥処理施設等の場内施設間を往復する際には、必ずしも車両や重機の消毒は実施していないとのこと。飼養管理者によると、日常的に農場入口への石灰散布を行なっているとのこと。
- ③ 飼養管理者によると、従業員はそれぞれ自宅で農場内専用作業着及び長靴を着用した状態で鶏舎に向かい、鶏舎に立ち入る際には、鶏舎専用の長靴への履き替えや更衣、手指消毒は行なっていなかったとのこと。踏込み消毒槽は全ての鶏舎で設置されていた。集卵場については、従業員は専用の靴に履き替えていたとのこと。
- ④ 飼養管理者によると、来場者は鶏舎内には立ち入らない飼料業者と集卵業者のみであり、来場者用の衣類や長靴は準備されていなかったとのこと。集卵場入口には踏込み消毒と手指消毒用スプレーが設置されていた。
- ⑤ 鶏舎単位で同一日齢の鶏が飼養されており、調査時には日齢の異なる3ロットの成鶏が3鶏舎（開放2鶏舎、ウインドウレス1鶏舎）で飼養されていた。
- ⑥ 開放鶏舎は基本的には自然換気とし、気温に応じて換気扇を使用していた。また、ロールカーテンを開閉することにより温度調節を行っていた。
- ⑦ 鶏舎ごとにオールイン・オールアウトを行っており、オールアウト後は除糞、鶏舎の洗浄消毒を実施しているとのこと。
- ⑧ 飼料タンク上部には蓋が設置されており、鶏舎内のラインを通して自動で給餌できる構造となっていた。
- ⑨ 飼養鶏への給与水は、発生鶏舎のみ井戸水（消毒なし）を用いており、発生鶏舎以外は市水を用いていたとのこと。井戸には蓋がされていた。
- ⑩ 鶏糞は、高床式開放鶏舎では2か月に1回程度、1階部分に堆積した糞を重機で除去し、自社トラックで400メートルほど離れた自社の処理施設へ搬出していた（発生鶏舎からの最後の搬出は通報の1週間程度前）とのこと。ウインドウレス鶏舎では鶏舎横のピットに一時的に堆積した後に、同様に処理施設に搬出していたとのこと。鶏糞は1年間ほどかけて完熟させ、完成した鶏糞肥料は耕種農家から購入希望があれば、販売・散布を行なっているとのこと。
- ⑪ 飼養管理者によると、死亡鶏は飼養管理時に回収し、衛生管理区域外の車庫内の冷蔵庫で

保管しており、週1回化製業者が回収しているとのこと。

- ⑫ 廃鶏は、オールアウト時に1週間程度かけて食鳥処理場に出荷しているとのこと。
- ⑬ 開放鶏舎で生産された鶏卵は手作業で集卵し、各鶏舎から直接集卵車に積載してGPセンターに出荷しているとのこと。ウインドウレス鶏舎では、鶏卵は自動集卵され、附帯する集卵場で洗浄・検卵・計量を行なった後に、当該農場専用のトレーで出荷しているとのこと。
- ⑭ 定期的に農場を訪問する管理獣医師はいないとのこと。

(7) 野鳥・野生動物対策

- ① 飼養管理者によると、高床式鶏舎の1階部分に逃げた鶏を狙ってタヌキが金網の破損部から侵入することがあり、破損を確認した場合は修復しているとのこと。調査時に、発生鶏舎横の柿の木の下に、タヌキのものと思われる糞の堆積を確認した。また、鶏舎周囲で野良猫を見たことがあるほか、鶏舎内でスズメを見かけるとのことで、調査中も鶏舎内へのスズメの侵入が見られた。
- ② 使用中の開放鶏舎については全ての窓や開口部に金網（目の大きさは3.5 cm程度）が設置されていたものの、発生鶏舎の天井付近や1階の壁や金網に中型哺乳動物が通過可能な大きさの穴が開いている箇所が複数見られた。
- ③ 発生鶏舎内にはネズミの糞と思われるものや齧り痕を確認したが、生きたネズミや死体は認めなかった。飼養管理者によると、殺鼠剤を散布した結果ネズミが減ったとの印象を持っているとのこと。

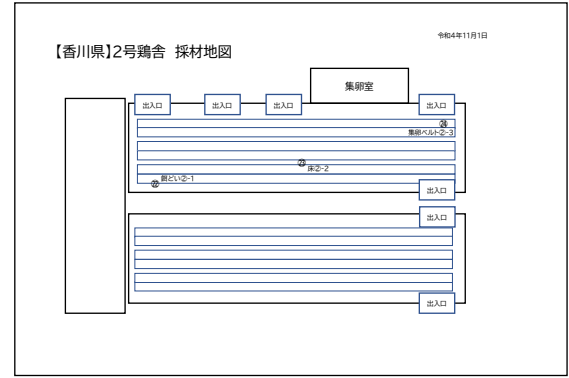
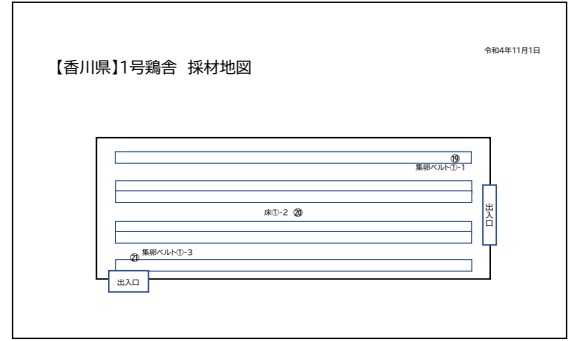
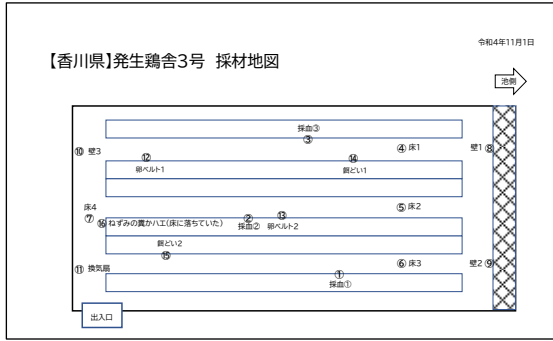
(8) 環境サンプル

環境検査材料リスト（全て陰性）

採材場所	採取したサンプル
発生鶏舎（3号舎）	鶏舎壁、床、餌樋、換気扇、ネズミ糞もしくはハエ 高床式鶏舎下階床、集卵ベルト
未発生舎（1号舎）	餌樋、床、集卵ベルト
未発生舎（2-1号舎）	餌樋、床、集卵ベルト

【発生鶏舎採材場所見取り図】

【発生鶏舎以外の採材場所】



4. 茨城県 1 例目（かすみがうら市）の事例

(1) 概要

① 所在地

茨城県かすみがうら市

② 飼養状況

採卵鶏 約 104 万羽

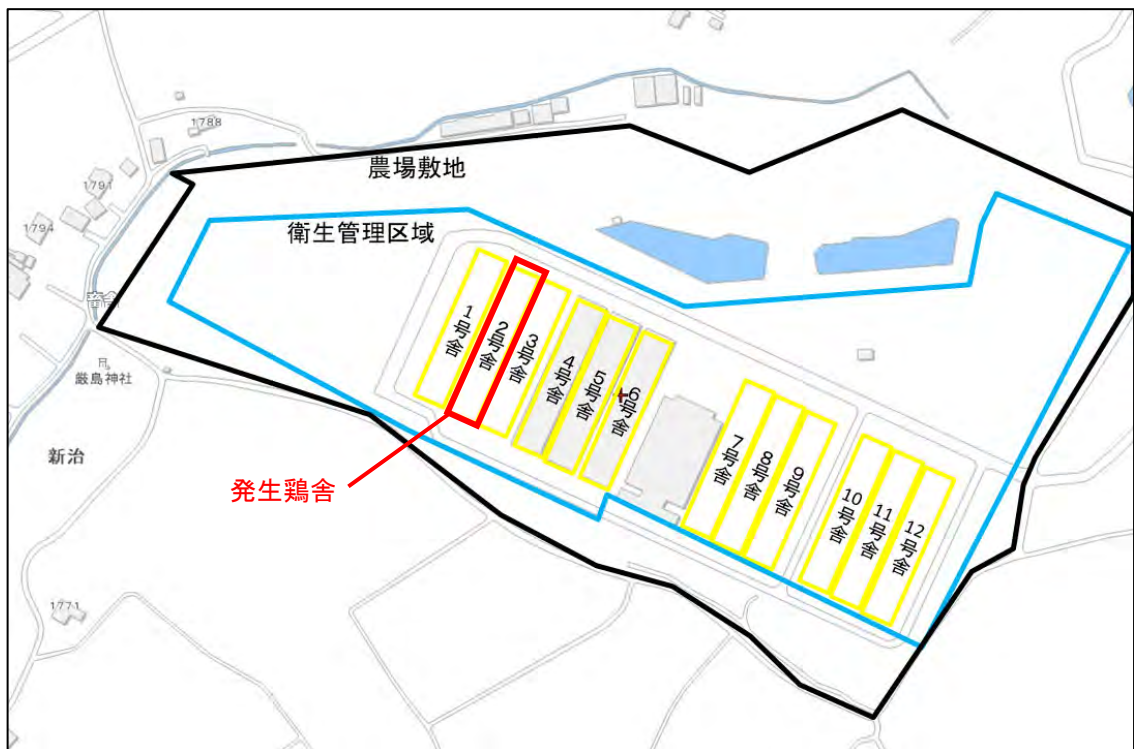
鶏舎	飼養羽数	日齢
1号舎	87,897羽	239日齢
2号舎 <発生鶏舎>	98,381羽	293日齢
3号舎	109,780羽	321日齢
4号舎	97,550羽	372日齢
5号舎	87,160羽	421日齢
6号舎	94,239羽	480日齢
7号舎	99,045羽	189日齢
8号舎 (空舎)	—	—
9号舎	99,536羽	141日齢
10号舎	88,000羽	684日齢
11号舎	85,227羽	601日齢
12号舎	88,272羽	509日齢

(令和4年11月4日現在)

③ 発生確認日

令和4年11月4日

④ 農場見取図



(2) 現地疫学調査実施年月日

令和4年11月4日

(3) 農場の周辺環境・農場概況

- ① 当該農場は標高25mほどの台地上に位置している。鶏舎の北側には2つのため池があり開けているが、南側は針葉樹の植林地や広葉樹といった樹高の高い林に囲まれていた。農場の周辺は平坦で畑などの耕作地が広がっていた。
- ② 調査時には、農場敷地内のため池でコガモ120羽を確認した。また、農場から3.3km離れたため池では、ヒドリガモ169羽、マガモ117羽等を確認した。
- ③ 当該農場はウインドレス鶏舎12棟からなり、発生時は空舎の1棟を除き、1鶏舎当たり8~10万羽の採卵鶏が飼養されていた。

(4) 通報までの経緯・発生時の状況

- ① 農場によると、発生鶏舎（通報時292日齢）では10月30日までは1日当たりの死亡数は10羽~35羽程度であったとのこと。31日に43羽の死亡があり、その一部が鶏舎内に偏って確認されたため、解剖を行ったところ、十二指腸の腫脹が認められたことからクロストリジウム症を疑い、系列会社の管理獣医師の指導により整腸剤の投与を始めたとのこと。同じ場所を中心に、11月1日に47羽、2日に98羽の死亡が確認され、3日に死亡羽数が増加していることから家畜保健衛生所に死亡羽数増加を通報するとともに、病性鑑定を依頼したとのこと。家畜保健衛生所への通報時には、既に管理獣医師が発生鶏舎の死亡鶏について鳥インフルエンザの簡易検査を実施して陽性を確認していたとのこと。
- ② 発生鶏舎は農場の西側に位置していた。農場によると、死亡鶏は入口から見て鶏舎後方1/4辺りから同心円状に認められたとのこと。
- ③ 調査時には、発生鶏舎後方から1/4辺りで死亡鶏が散在していた。また、隣接する鶏舎においても固まって死亡鶏が認められた。

(5) 管理人及び従業員

- ① 農場によると、当該農場では58名の専属の従業員のうち30名が鶏舎管理を担当していたとのこと。飼養管理者は鶏舎ごとに担当者を決めているが、状況により担当の鶏舎以外の作業を実施することもあるとのこと。その場合は鶏舎ごとに専用の防護服に着替え、交差汚染しないよう対策していたとのこと。
- ② 鶏舎管理以外の28名は、集卵作業、鶏糞・堆肥処理等に従事しており、鶏舎管理との行き来はなかったとのこと。

(6) 農場の飼養衛生管理

- ① 農場によると、従業員が衛生管理区域に入る際は、農場外の更衣室で農場専用の作業着に着替え、隣接する事務所までスノコ上を移動し、事務所の衛生管理区域側の出口で手指消毒、手袋の着用、農場専用の長靴の着用を実施しているとのこと。
- ② 車両で農場に立ち入る外来者は、農場に入る前、ゲート横のプレハブで農場内専用の作業着及び長靴を着用し、手指消毒後に手袋を着用しているとのこと。その際、車内足元には農場内専用のビニールを敷いているとのこと。
- ③ 車両が農場に入る際は、農場入口に設置された消毒ゲートで車両消毒を実施しているとのこと。
- ④ 従業員及び外来者が各鶏舎に入る際は、靴底消毒後に前室で鶏舎専用の防護服を上から着用するとともに靴を履き替え、手指消毒後に手袋を着用しているとのこと。作業後は入場と逆の手順で退出し、防護服は1日の作業終了時に捨てているとのこと。
- ⑤ 鶏舎周りの消石灰は少なくとも週に1回散布し、雨の後は迅速に散布しているとのこと。

- ⑥ 鶏舎は、屋根に金網が張られたスリット状の吸気口があり、屋根裏に設置されたファンにより外気を引き込んで吸気を行っている。排気は段違いの鶏舎側面の壁から行われ、外部は防鳥ネットが隙間なく張られていた。また、排水溝が鶏舎内から鶏舎外に設置されていたが、鶏舎内のねじ付きの蓋を開けないと排水できず、常時閉まっているとのこと。
- ⑦ 鶏舎横の飼料タンク上部には蓋が設置されており、全ての鶏舎で鶏舎内のラインを通じて自動給餌を行っていた。
- ⑧ 飼養鶏への給与水は井戸水を利用しており、消毒を実施した上で鶏舎内に自動給水されていたとのこと。
- ⑨ 通常、オールアウト後は鶏舎内の除糞と清掃・消毒を行い、その後の空舎期間を2～3週間程度設けていたとのこと。
- ⑩ 鶏糞はベルトコンベアで鶏舎から敷地内のコンポストに運ばれて処理されるとのこと。一部の生糞、一次発酵産物は、系列会社の堆肥処理施設に搬出して処理しているとのこと。
- ⑪ 死亡鶏は毎日の健康観察時に回収し、鶏舎担当者が農場内の冷蔵コンテナに搬入して保管しており、業者が週1回収りにきているとのこと。
- ⑫ 重機や器材などの他農場との共用は行っていないとのこと。

(7) 野鳥・野生動物対策

- ① 農場内では野生動物はほとんど見かけず、野鳥ではカラスを見るほか、ネコを見るとのこと。調査時には、鶏舎間の空き地の地面を歩くハクセキレイや上空を通過するハシブトガラスなどの鳥類を見かけた。農場敷地内で小型哺乳類のものと思われる糞が確認された。
- ② 鶏舎内では時折ネズミを見かけるため、殺鼠剤、粘着シート、捕獲かごを設置しており、調査時には発生鶏舎内で捕獲かご内にネズミがいることを確認した。また、鶏舎内ではネズミの糞や水道管の断熱保護材の齧り痕等のラットサインが認められた。

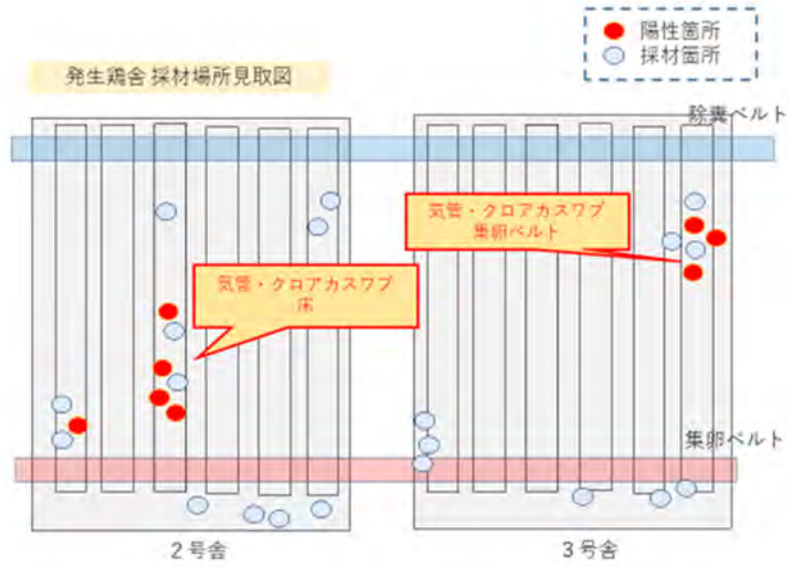
(8) 環境サンプル

環境検査材料リスト（下線部はウイルスが検出された検体）

採材場所	採取したサンプル
発生鶏舎（2号舎）	床、長靴底、棚、 <u>気管・クロアカスワブ（死鳥）</u> 、 <u>床</u> 、埃、集卵ベルト、ケージ、吸気口、壁、排気口、小動物の糞
発生鶏舎（3号舎）	床、長靴底、棚、 <u>気管・クロアカスワブ（死鳥）</u> 、 <u>気管・クロアカスワブ（生鳥）</u> 、壁、 <u>集卵ベルト</u> 、埃、換気扇、吸気口、
未発生鶏舎（1号舎）	気管・クロアカスワブ（生鳥）
未発生鶏舎（4号舎）	気管・クロアカスワブ（生鳥）、 <u>餌</u>

※発生時は2号舎のみ発生鶏舎としたが、サンプル採材時3号舎でも死亡増加が認められたため、3号舎も発生鶏舎扱いとし採材実施。

【発生鶏舎採材場見取り図】



【発生鶏舎以外の採材場所】



5. 岡山県2例目（倉敷市）の事例

(1) 概要

① 所在地

岡山県倉敷市

② 飼養状況

採卵鶏 約51万羽

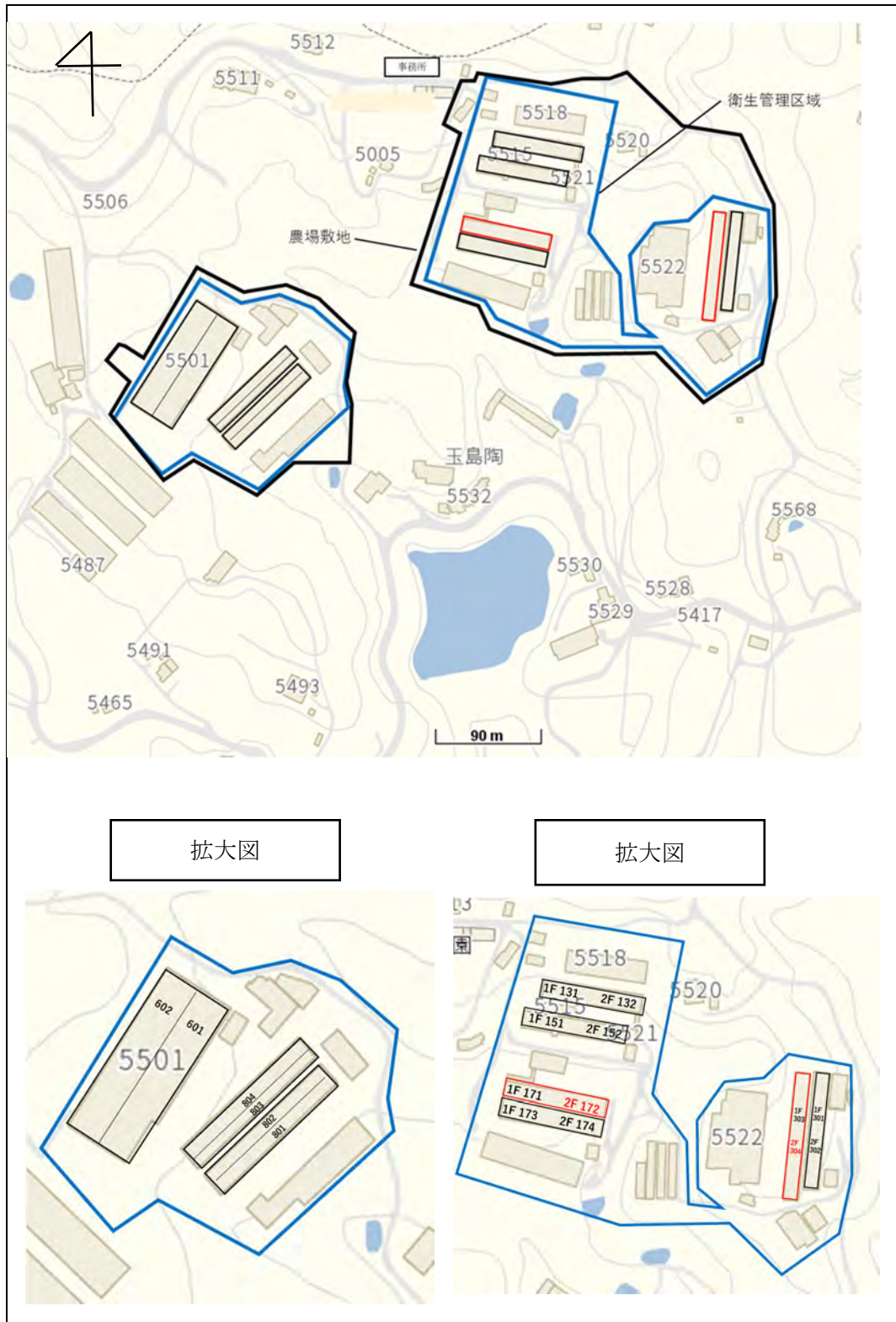
鶏舎	飼養羽数	日齢
131号舎	30,430羽	238日齢
132号舎(空舎)	—	—
151号舎	31,164羽	178日齢
152号舎	30,227羽	329日齢
171号舎	25,993羽	633日齢
172号舎 <発生鶏舎>	26,619羽	598日齢
173号舎	28,383羽	574日齢
174号舎	29,584羽	451日齢
301号舎	30,504羽	206日齢
302号舎	30,843羽	269日齢
303号舎	28,502羽	602日齢
304号舎 <発生鶏舎>	29,249羽	542日齢
601号舎	33,117羽	483日齢
602号舎	31,568羽	416、413日齢
801号舎	35,115羽	388日齢
802号舎	35,032羽	360日齢
803号舎	30,178羽	847、745、728日齢
804号舎	29,035羽	665日齢

(令和4年11月4日現在)

③ 発生確認日

令和4年11月4日

④ 農場見取図



(2) 現地疫学調査実施年月日
令和4年11月4日

(3) 農場の周辺環境・農場概況

① 当該農場は山間の谷沿いにあり、国内1例目の発生農場から約3km南方に位置する。周囲

は森林に囲まれ、農場が所在する地域には複数の池が存在していた。

- ② 農場は一般道路を介して第1、第3、第6及び第8農場の4つの区域に分かれており、これらの中間地点に事務所が所在していた。
- ③ 第1、第3、第8農場には、2階建てのウインドウレス鶏舎がそれぞれ4棟、2棟、2棟あり、第6農場には2階建ての開放鶏舎1棟が設置されていた。発生農場である第1及び第3農場の鶏舎はいずれも4段4列式のケージ飼いであり、発生鶏舎は2階にあった。

(4) 通報までの経緯・発生時の状況

- ① 飼養管理者によると、日曜日を除いて毎朝行っている死亡鳥の見回りで、11月3日朝に第1農場（約85週齢）及び第3農場（約77週齢）の計2か所で鶏が複数羽まとまって死亡しているのを確認したため、家畜保健衛生所に通報したとのこと。これらの2か所以外でかたまつた死亡は認められなかったとのこと。
- ② 疫学調査時（11月4日午後）においても、通報時と同一の場所付近のケージ及び通路を挟んだ向かいのケージにおいて、死亡鶏や衰弱した鶏が確認された。一方、これらの2か所以外のケージでは異状は認められなかった。

(5) 管理者及び従業員

- ① 飼養管理者によると、当該農場では社員26名と外国人実習生6名の計32名が勤務しており、各農場6名ずつ（第1農場のみエリアを2つに分け、6名×2チーム）が原則的に1つの農場を専門に担当しているとのこと。ただし、状況により担当農場以外で作業を実施することもあるとのこと。
- ② 担当農場は4週に一度変更され、直近では2週間ほど前に担当の変更があったとのこと。このほか、第3農場敷地内の堆肥処理施設の担当になる者もいるとのこと。

(6) 農場の飼養衛生管理

- ① 飼養管理者によると、事務所が農場の衛生管理区域外にあり、4つの農場のいずれかに車両が入る際は、事務所前にある動力噴霧器で車両消毒を行っているとのこと。消毒後、各農場まで衛生管理区域外を通過し、農場入口の消石灰帯を通行して農場に入っているとのこと。
- ② 飼養管理者によると、従業員は、事務所で農場内専用作業着、長靴を着用していたが、農場入口で改めて長靴の交換や手指の消毒は行っていなかったとのこと。
- ③ 飼養管理者によると、鶏舎に入る際は、鶏舎外側で踏込み消毒（逆性石けん）を実施し、鶏舎内側ですのこを踏み越えて鶏舎内専用の長靴に履き替えて踏込み消毒（消石灰）を実施するとともに、消毒スプレーで手指の消毒を行っているとのこと。
- ④ 集卵ベルトが屋外に出る部分は高所に設けられ、また、全体がカバーで覆われていたため、小動物の侵入は困難と考えられた。
- ⑤ 飼料タンク上部には蓋が設置されており、鶏舎内のラインを通して自動で給餌する構造となっていた。
- ⑥ 飼養管理者によると、飼養鶏への給与水や鶏舎内を洗浄する水など鶏舎内で用いられる水は全て水道水を用いているとのこと。
- ⑦ 飼養管理者によると、鶏糞は、毎週火曜日及び金曜日にベルトコンベアで鶏舎横の集積場に運搬されているとのこと。集積場は、シャッター付きの建屋で覆われていた。農場ごとに集積された鶏糞は、最終的に第3農場の堆肥処理施設に運ばれ、コンポストで処理されていた。
- ⑧ 飼養管理者によると、死亡鶏は毎朝の健康観察時に回収し、農場内の死亡鶏処置装置で処理しているとのこと。
- ⑨ ウインドウレス鶏舎内の換気は、クーリングパッドを備えた面ともう一方の排気ファンを備えた面を通して行われていた。クーリングパッドの鶏舎内側には1辺約2cm亀甲金網が

張られていた。

(7) 野鳥・野生動物対策

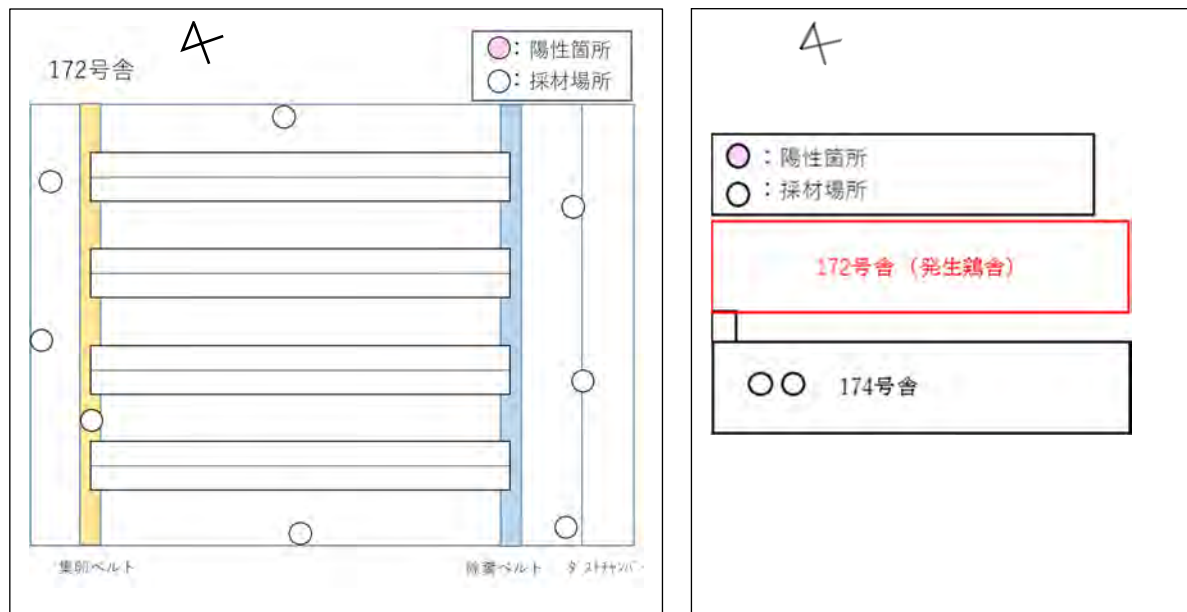
- ① 飼養管理者によると、農場周辺においてイノシシ等の野生動物やカラス、スズメを目撃することがあるとのこと。調査の際にも、哺乳動物の糞や足跡が確認された。
- ② 調査時には、堆肥処理施設内に多数のネコが住み着いているのが確認された。
- ③ 調査時、発生鶏舎では、断熱材のかじり跡、糞など、ネズミ侵入の痕跡を認めた。

(8) 環境サンプル

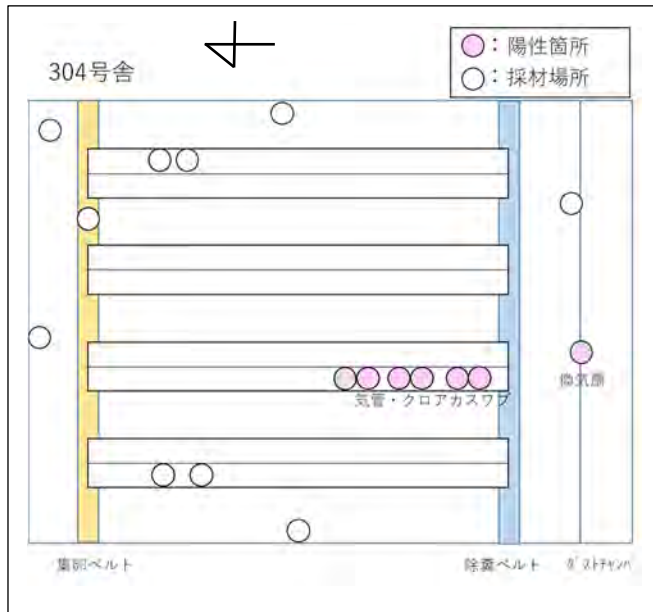
環境検査材料リスト（下線部はウイルスが検出された検体）

採材場所	採取したサンプル
発生鶏舎（172号舎）	前室床、壁、集卵ベルト、ねずみの糞、換気扇
発生鶏舎（304号舎）	前室床、壁、集卵ベルト、換気扇、 <u>気管・クロアカスワブ（死鳥）</u>
未発生舎（174号舎）	気管・クロアカスワブ（死鳥）
未発生舎（303号舎）	気管・クロアカスワブ（死鳥）
農場内	水（農場内の水たまり）

【発生鶏舎採材場の見取り図】



【発生鶏舎以外の採材場所】



6. 北海道2例目（伊達市）の事例

（1）概要

① 所在地

北海道伊達市

② 飼養状況

肉用鶏 約15万羽

鶏舎	飼養羽数	日齢
1号	9,150羽	45日齢
2号	9,303羽	45日齢
3号	9,285羽	43日齢
4号	8,564羽	43日齢
5号	9,395羽	42日齢
6号	9,193羽	42日齢
7号<発生鶏舎>	8,732羽	42日齢
8号	8,790羽	41日齢
9号	9,405羽	41日齢
10号	8,755羽	40日齢
11号	8,820羽	40日齢
12号	9,172羽	39日齢
13号	9,196羽	39日齢
14号	8,949羽	39日齢
15号	8,815羽	38日齢
16号	9,258羽	38日齢

（令和4年11月7日現在）

③ 発生確認日

令和4年11月7日

④ 農場見取図



(2) 現地疫学調査実施年月日
令和4年11月8日

(3) 農場の周辺環境・農場概況

- ① 当該農場は山麓の海岸沿い高台に位置し、周囲を林や牧草地に囲まれていた。
- ② 農場の衛生管理区域外の北側に隣接して、雨水や浄化槽で処理した鶏舎内の排水を処理するための浸透池が存在し、調査時にはコガモ6羽が確認された。

(4) 通報までの経緯・発生時の状況

- ① 飼養管理者によると、発生鶏舎（通報時40日齢）では、通常1日当たりの死亡羽数（淘汰羽数を含む。以下同じ。）は5～6羽程度であったとのこと。11月2日の死亡羽数は16羽であったところ、3日に23羽、4日に62羽、5日に66羽となったが、当初は出荷サイズ調整のため飼料給与量の調整を開始した時期であったことから、これに伴うストレスを契機とした大腸菌症増加を疑っていたとのこと。6日に72羽死亡したことから、飼養管理者が死亡鶏を解剖検査したところ大腸菌症を疑う所見がなかったため、管理獣医師に連絡したとのこと。当該獣医師が立ち入った際に改めて死亡鶏を解剖検査したところ、大腸菌症を疑う所見が数羽で見られた一方、死因不明の鶏が多く見られたことから、家畜保健衛生所に通報したとのこと。
- ② 発生鶏舎は農場の北側のほぼ中央に位置していた。飼養管理者によると死亡鶏は鶏舎内の全体に散在していたとのこと。
- ③ 調査時には、発生鶏舎の殺処分は終了していたが、家畜保健衛生所によると鶏舎全体で死亡鶏が散在していたとのこと。調査時、発生鶏舎以外の鶏がいる鶏舎では特筆すべき異状は認められなかった。

(5) 管理者及び従業員

- ① 飼養管理者によると、当該農場では、農場専属の飼養管理者3名が飼養管理等を行うほか、系列会社の飼養管理部門の担当社員1名が1週間に1回程度来場し、鶏舎内の状況を確認しているとのこと。
- ② 担当社員は1名で2地区の系列農場を担当しており、農場への立入りは原則として1日に

1農場のみとしていたが、過去にはやむを得ず1日に2農場へ立ち入ることがあった。なお、その場合立入り時には系列会社の事務所でシャワー、着替え及び消毒を行っていたとのこと。

- ③ 飼養管理者は鶏舎ごとの担当分けはしていないとのこと。

(6) 農場の飼養衛生管理

- ① 当該農場はセミウインドレス鶏舎16棟からなり、発生時は全棟で肉用鶏が飼養されていた。
- ② 飼養管理者によると、車両が農場に入る際は、農場入口に設置された車両消毒ゲートによる車両消毒を実施しているとのこと。
- ③ 飼養管理者は衛生管理区域内の事務所で農場内専用作業着及び長靴を着用していたとのこと。各鶏舎に入る際は、鶏舎入口の前室側に置いた踏み消毒（逆性せっけん。数日に1回交換）槽内で鶏舎外作業用の長靴を脱いで鶏舎内に置いた専用の長靴に履き替え、鶏舎内に置いた消毒スプレーで手指を消毒していたとのこと。調査時には、一部の鶏舎で消毒スプレーが空になっていた。
- ④ 鶏舎に立ち入る外来者は、衛生管理区域内の駐車場で持参した農場内専用作業着、帽子及び長靴の着用及び消毒を行っていたとのこと。鶏舎間の出入り時には長靴及び手指の消毒をしていたとのこと。
- ⑤ 鶏舎に立ち入らない外来者は、場内備付けの農場内専用作業着、長靴に交換していたとのこと。
- ⑥ 鶏舎は、壁面上部に吸気口があり、開閉用の蓋と網目が約2cmの金網が設置されていた。開閉用の蓋は、コンピュータ制御により自動で開閉するとのこと。また、壁面下部の外側にはクーリングパッド、その内側にはロールカーテンと網目が約2cmのプラスチック製ネットが設置されていた。ネットには多数の破損箇所があり、一部は針金によって補修されていた。
- ⑦ 鶏舎奥及び側面の壁には排気ファンが設置されており、自動で運転制御されていた。鶏舎内側には網目が約2cm×約4cmの金網、外側にはシャッターが設置されていたが、調査時、発生鶏舎では排気ファン1か所で金網が脱落し、ファン停止中だがシャッターブレードが開いている部分も確認され、野生動物の侵入が可能と考えられた。
- ⑧ 調査時、発生鶏舎外壁のトタン板の1か所がずれて鶏舎内部構造が露出していた。出荷用出入口の扉2か所（外部及び前室の間並びに前室及び鶏舎間）は閉鎖時でも壁面との間に約2～3cmの隙間があった。前室には排水用の外部に通じる塩化ビニール製のパイプが2か所あり、ネット等は張られていなかった。これらからは野生動物の侵入が可能と考えられた。
- ⑨ 鶏舎横の飼料タンク上部には蓋が設置されており、全ての鶏舎で鶏舎内のラインを通じて自動給餌を行っていた。
- ⑩ 飼養鶏への給与水は井戸水を利用しており、塩素消毒を実施していたとのこと。
- ⑪ 通常、数日かけてオールイン・オールアウトを行っており、オールアウト後は数日かけて鶏舎内の除糞と清掃・消毒を行い、その後の空舎期間を5～6日程度設けていたとのこと。
- ⑫ 直近のオールアウト及び鶏糞の運び出しは1か月以上前だったとのこと。
- ⑬ 通常、33日齢で中抜き出荷を行っており、自社の食鳥処理施設へ搬出していたとのこと。10月31日に5号鶏舎、6号鶏舎及び発生鶏舎（7号鶏舎）からの中抜き出荷を行ったとのこと。
- ⑭ 死亡鶏は毎日の健康観察時に回収し、鶏舎入口の外側にビニール袋に入れて置いており、ほぼ毎日自社運送車が農場内に入場して回収していたとのこと。
- ⑮ 重機や器材などの他農場との共用はなかったとのこと。

(7) 野鳥・野生動物対策

- ① 農場内では野生動物はほとんど見かけず、野鳥ではカラス及びスズメを見るほか、まれにキツネを見たことがあるとのこと。調査時には、農場敷地内や鶏舎の屋根上にハシボソガラスが確認された。また、発生鶏舎前室に食肉目の動物のものと思われる古い糞が落ちていた。
- ② 鶏舎内においてネズミを見かけることがあり、ネズミ対策として鶏舎前室に殺鼠剤を設置していたとのこと。調査時には、発生鶏舎を含め鶏舎内にはネズミによるものと思われるプラスチック製ネット、ロールカーテン、クーリングパッド等のかじり跡が確認された。

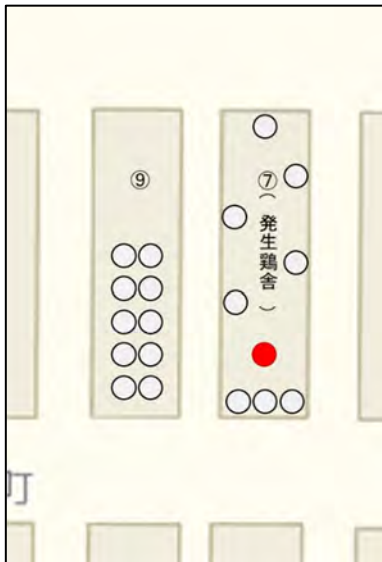
(8) 環境サンプル

環境検査材料リスト (下線部はウイルスが検出された検体)

採材場所	採取したサンプル
発生鶏舎 (鶏舎⑦)	前室床、前室長靴底、前室床面小動物排泄物 (ネズミ)、鶏舎内壁面、排気ファン、 <u>鶏舎内送風機付着塵芥</u>
未発生舎 (鶏舎⑨)	死鳥気管スワブ (5羽陰性) 死鳥クロアカスワブ (5羽陰性)

<採材場所>

7.



○ : 採材場所
● : 陽性場所

7. 岡山県3例目（倉敷市）の事例

(1) 概要

① 所在地

岡山県倉敷市

② 飼養状況

採卵鶏 約3.4万羽

鶏舎	飼養羽数	日齢
W1号舎	11,020羽	571日齢
W2号舎	11,154羽	508日齢
W3号舎（空舎）	—	—
W4号舎 <発生鶏舎>	10,886羽	631日齢
高床2号舎	695羽	305日齢

（令和4年11月11日現在）

③ 発生確認日

令和4年11月11日

④ 農場見取図



(2) 現地疫学調査実施年月日
令和4年11月11日

(3) 農場の周辺環境・農場概況

- ① 当該農場は山間の谷沿いにあり、国内1例目の発生農場から約4km南方、国内5例目の発生農場のすぐ隣に位置する。周囲は森林や竹林に囲まれ、農場が所在する地域には複数の池が存在していた。
- ② 農場には、ウインドウレス鶏舎1棟（内部で北側及び南側の1階及び2階の4部屋に分かれる）、開放鶏舎1棟のほか、現在は使用されていない鶏舎が2棟設置されていた。発生場所はウインドウレス鶏舎の北側1階の部屋であった。ウインドウレス鶏舎は各部屋とも4段2列式のケージ飼いであった。
- ③ 発生時、ウインドウレス鶏舎の北側2階の部屋はオールアウト後で空であり、その他の部屋では採卵鶏が各約10,000羽飼養されていた。また、開放鶏舎には、他社の委託を受けて別品種の鶏が約700羽飼養されていた。

(4) 通報までの経緯・発生時の状況

- ① 飼養管理者によると、毎朝行っている死亡鳥の見回りで、11月10日朝にウインドウレス鶏舎北側1階奥のケージで6羽中1羽の死亡、2羽の衰弱を確認し、家畜保健衛生所に連絡したとのこと。家畜保健衛生所からは少し様子を見るよう指示があり、3時間後に再度確認したところ、衰弱状態の2羽のうち1羽が死亡しており、同一ケージ内の他の鶏も衰弱していたことから通報に至った。このケージ以外に異状は認めなかったとのこと。
- ② 疫学調査時（11月11日午後）においては、発生が認められたケージの隣のケージに1羽の衰弱状態の鶏が確認された。一方、他の鶏舎を含む他のケージでは異状は認められなかった。

(5) 管理者及び従業員

- ① 当該農場では社員2名、委託社員1名、パート1名、アルバイト1名の計5名が勤務しているとのこと。
- ② ウインドウレス鶏舎の内部の管理は社員2名が行っており、清掃のためにアルバイトが入ることがあるとのこと。
- ③ 開放鶏舎の内部の管理は委託社員1名が行っているとのこと。

(6) 農場の飼養衛生管理

- ① 飼養管理者によると、農場に車両が入る際は、入口手前で動力噴霧器による車両消毒を行っており、農場入口の消石灰帯を通行して農場に入っているとのこと。
- ② 飼養管理者によると、従業員は、消石灰を入れた踏込み槽を踏んで農場内の事務所に入り、農場内専用作業着、長靴を着用し、手指の消毒を行っているとのこと。
- ③ 飼養管理者によると、鶏舎に入る際は、消石灰を入れた踏込み槽を踏んで鶏舎に入り、鶏舎内専用の靴に履き替えるとともに、消毒スプレーで手指の消毒を行っているとのこと。
- ④ 集卵ベルトが屋外に出る部分は高所に設けられ、また、全体がカバーで覆われていたが、ベルト下部には一部隙間が見られた。
- ⑤ 給餌及び給水については、鶏舎内のラインを通して自動で行われる構造となっていた。
- ⑥ 飼養管理者によると、飼養鶏への給与水として用いられる水は全て水道水を用いているとのこと。
- ⑦ 飼養管理者によると、ウインドウレス鶏舎においては、鶏糞は、毎日ベルトコンベアで鶏舎横につけた専用のトラックの荷台に直接排出し、農場内の堆肥処理施設まで運んでいるとのこと。開放鶏舎については、下部に鶏糞が堆積しており、飼養管理者によると、一部

は重機によって運び出しているとのことだが、多くは堆積したまま放置されていた。

- ⑧ 飼養管理者によると、死亡鶏は毎朝の健康観察時に回収し、バケツリフトに入れて堆肥処理施設に運搬し、コンポストで鶏糞とともに処理しているとのこと。死亡鶏の運搬に使用したバケツの消毒は実施していないとのこと。
- ⑨ 飼養管理者によると、鶏舎内の清掃は毎日行っているとのこと。
- ⑩ 飼養管理者によると、鶏舎ごと（ウインドウレス鶏舎については部屋ごと）にオールイン・オールアウトを実施しており、アウト後と導入前に清掃・消毒を行っているとのこと。
- ⑪ 飼養管理者によると、ウインドウレス鶏舎内の換気は、出入口そばに設置されたファンによって排気を行い、鶏舎外壁に設置されたクーリングパッドを通して吸気を行っているとのこと。

(7) 野鳥・野生動物対策

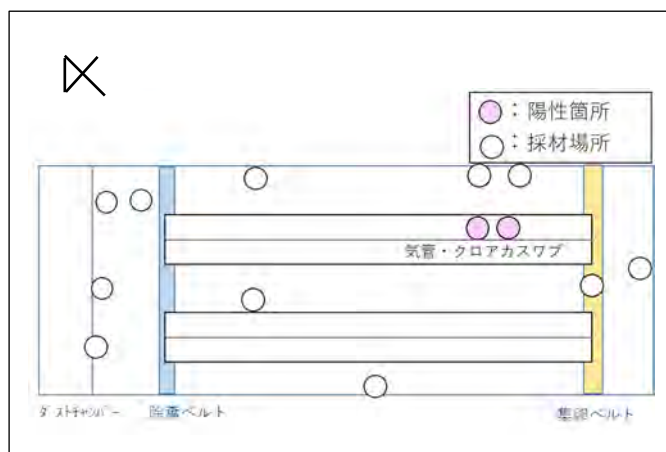
- ① 飼養管理者によると、鶏舎外の農場区域内においてイノシシやカラスを目撃することがあるとのこと。調査時には、イノシシの足跡やヒヨドリが確認された。
- ② 鶏舎内ではネズミを目撃することがあるとのこと。調査時にも、発生ケージから5m程度の距離にある鶏舎の壁に張られたクーリングパッド内側に複数のネズミのかじり跡を確認し、そのうち1つは鶏舎外に貫通していた。また、クーリングパッド周辺にはネズミのものと思われる糞を認めた。
- ③ 飼養管理者によると、ネズミ対策として、殺鼠剤及びネズミ捕り用粘着シート（又は捕獲かご）をウインドウレス鶏舎の各部屋の4隅に置いているとのこと。

(8) 環境サンプル

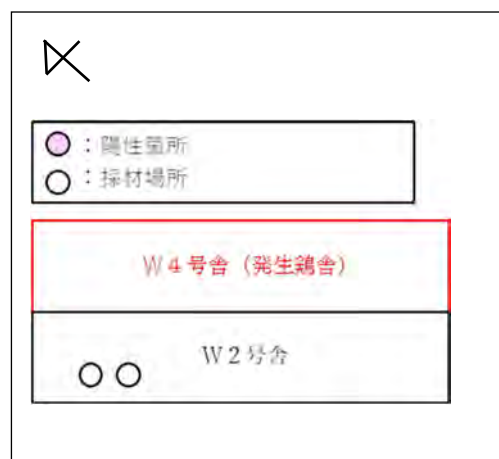
環境検査材料リスト（下線部はウイルスが検出された検体）

採材場所	採取したサンプル
発生鶏舎（W4号舎）	前室床、長靴底、壁、集卵ベルト、 <u>気管・クロアカスワブ</u> （死鳥）、 <u>ネズミの糞</u>
未発生舎（W2号舎）	気管・クロアカスワブ
農場内	水（高床鶏舎脇の水たまり）

【発生鶏舎採材場の見取り図】



【発生鶏舎以外の採材場所】



8. 和歌山県 1 例目（白浜町）の事例

(1) 概要

① 所在地

和歌山県白浜町

② 飼養状況

展示用あひる等 63 羽

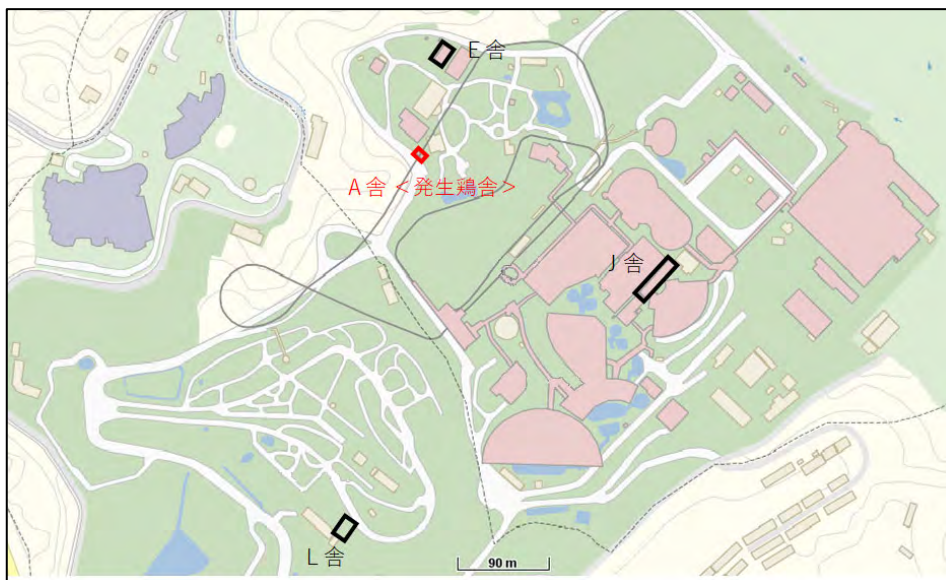
鶏舎	飼養羽数	日齢
A 舎 <発生家きん舎>	30 羽（あひる、がちょう）	不明
E 舎	14 羽（エミュー）	不明
J 舎	18 羽（コールドック）	不明
L 舎	1 羽（ダチョウ）	不明

（令和 4 年 11 月 11 日現在）

③ 発生確認日

令和 4 年 11 月 11 日

④ 農場見取図



(2) 現地疫学調査実施年月日

令和 4 年 11 月 11 日

(3) 施設の周辺環境・施設概況

- ① 当該施設は、多様な動物種を展示用として飼養する観光施設で、利用者は施設内を徒歩で移動して動物を観察できるようになっていた。
- ② 施設の周囲は、山林に囲まれていた。
- ③ 施設から 1.2 km の距離にあるため池では、マガモ 42 羽、ヒドリガモ 37 羽、カルガモ 33 羽などカモ類が約 140 羽確認された。
- ④ あひるは通常、ふれあい広場内収容舎で飼養されており、9 時 30 分から 15 時 30 分頃までふれあい広場で展示されていた。高病原性鳥インフルエンザの国内発生を受け、11 月 2 日にがちょうとともに予防的にヤギ舎への隔離を行った（導入前に消毒を実施）。調査時、ふれあい広場収容舎内にはモモイロペリカンが隔離されていた。ふれあい広場内収容舎及び

ヤギ舎には屋根が付いており、鳥種ごとに部屋を分けて飼養していたが、ふれあい広場についてはフェンスで囲まれた野外であった。

(4) 通報までの経緯・発生時の状況

- ① 11月9日、ヤギ舎で飼養していたあひる1羽の死亡を確認したが、死因は腸重積であり、鳥インフルエンザの検査はせずに焼却場横の冷凍庫に一時保管後、翌10日朝に火葬済み。
- ② 11月10日朝に、あひる3羽の死亡を確認。専属獣医師により鳥インフルエンザの簡易検査を行ったところ、3羽とも陽性。9時50分に家畜保健衛生所へ通報した後も、更にあひる3羽の死亡を確認（計6羽死亡）。
- ③ 11月10日に家畜保健衛生所が立入りし、死鳥計6羽と生鳥2羽の簡易検査を行ったところ、8羽とも陽性となった。

(5) 管理者及び従業員

- ① 当該施設には、飼養管理の従業員が110名おり、あひるについては主にふれあい広場を担当する職員10名がシフト制で対応していた。専門学校の研修生が飼養管理を手伝うこともあったが、あひるの隔離以降は専門学校の研修生にはあひるの飼養管理は行わせていなかった。直近では9月24日及び11月9日にあひるの死亡が確認されていた。
- ② 飼養担当者によると、ふれあい広場を担当する職員は、鳥類、げっ歯類、特定動物、サルの管理担当者を分けていたものの、シフト制のため飼養管理は別の動物の担当者が行うことも多かったとのこと。
- ③ 飼養管理の流れは基本的に、朝に治療個体以外の個体をふれあい広場に出し、その後給餌及び清掃を行っていた。

(6) 施設の飼養衛生管理

- ① 当該施設によると、国内の高病原性鳥インフルエンザ発生を受け、11月2日にふれあい広場で展示されていたあひる及びがちょうをヤギ舎に隔離し、11月3日から鳥類のふれあい及び餌販売を中止したが、11月1日まではふれあい広場に解放されており、利用者が餌をやるなど触れることが可能な状態であった。ふれあい広場入口には、消毒マット及び手指消毒が設置されていた。11月4日には、全ての鳥類の屋外展示を中止し、利用者への餌販売を休止していたとのこと。
- ② 施設内に入場する車両は、施設出入口から従業員用の道路へ入る際に消毒マットによる消毒を実施していたとのこと。
- ③ 施設によると、従業員は、施設外にある事務所で手指消毒（アルコール）、施設制服への更衣、施設用白靴への履替えを行い、それぞれの動物飼養舎付近の事務所で専用長靴に履き替えていた。
- ④ ふれあい広場内収容舎及びヤギ舎の各舎入口で従業員は踏込み消毒をして入室していた。手指消毒は実施していなかった。
- ⑤ ふれあい広場内収容舎のあひるを飼養していた部屋は、外に面する部分が防鳥ネットで覆われていた。
- ⑥ ヤギ舎は網戸つきの窓がついていたが、直近ひと月は開放していないとのこと。天井はトタンになっており、トタンと壁上部の隙間には格子がついていた。ヤギ舎内のそれぞれの部屋には外に面した壁の1か所に開口部があり、格子（幅は1cm程度）がついていた。
- ⑦ 飼料業者は固定ではなく、月やロットによって契約する業者が異なるとのこと。
- ⑧ 飼養動物への給与水は水道水だった。
- ⑨ ヤギ舎への隔離中に出た糞は、餌の食べ残しの飼料とともにビニール袋に入れて回収したのち、施設敷地内で焼却処分していた。
- ⑩ 死亡した展示動物は施設内の動物病院に持ち込まれ、その近くの焼却場で処分されるとのこと。

(7) 野鳥・野生動物対策

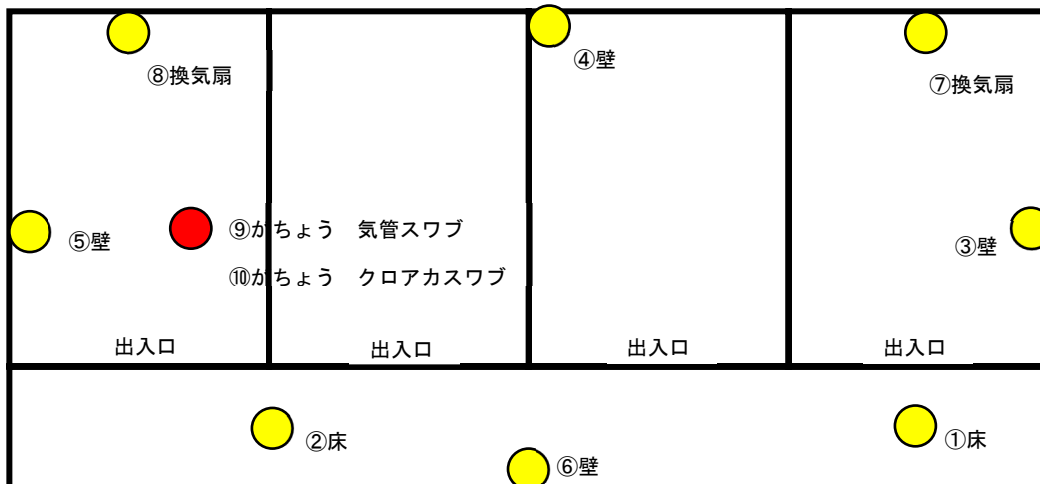
- ① 従業員によると、施設内では、カラス、スズメ、ヒヨドリ等の野鳥が見られるとのこと。施設の外ではネコやイタチを見かけるとのこと。調査時には、ふれあい広場周辺でハシブトガラス、ヒヨドリ、ウグイス等を確認した。
- ② ふれあい広場にはよくカラス、カモ、サギ、スズメ、ヒヨドリ等が飛来してくるとのこと。
- ③ 従業員によると、3日ほど前（11月9日）に園内で野鳥2羽（ハト及び種不明）の死体を回収しているとのこと。
- ④ ふれあい広場内収容舎ではネズミをよく見かけることから、ネズミ対策として粘着式のネズミ捕りを設置する、排気口に網をかける等を実施しているとのこと。
- ⑤ ヤギ舎ではネズミ等の野生動物の痕跡は見られなかった。柱の一部に腐食がみられたものの、外部には通じていないようだった。
- ⑥ 餌については、施設内全体の飼料保管庫で調整したのち各飼養舎の飼料保管庫に持ち込まれ、食べやすいように細断し給餌しているとのこと。施設内全体の飼料保管庫は高床になっていた。ふれあい広場内収容舎の飼料保管庫の扉は引き戸であったが、11月2日までは開放されていたとのこと。

(8) 環境サンプル

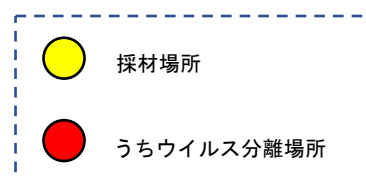
環境検査材料リスト（下線部はウイルスが検出された検体）

採材場所	採取したサンプル
A舎 <発生家きん舎>	通路床①②、壁③④⑤⑥、換気扇⑦⑧、 <u>死亡がちょう 気管スワブ⑨</u> 、 <u>死亡がちょう クロアカスワブ⑩</u>

【発生家きん舎採材場所見取り図】



鶏舎出入口



9. 兵庫県 1 例目（たつの市）の事例

(1) 概要

① 所在地

兵庫県たつの市

② 飼養状況

採卵鶏 約 4.4 万羽

鶏舎	飼養羽数	日齢
西鶏舎<発生鶏舎> 1	2,587 羽	632 日齢
西鶏舎<発生鶏舎> 2	2,776 羽	604 日齢
西鶏舎<発生鶏舎> 3	2,869 羽	264 日齢
西鶏舎<発生鶏舎> 4	2,806 羽	300 日齢
西鶏舎<発生鶏舎> 5	2,921 羽	177 日齢
西鶏舎<発生鶏舎> 6	2,944 羽	153 日齢
西鶏舎<発生鶏舎> 7	2,887 羽	234 日齢
西鶏舎<発生鶏舎> 8	2,900 羽	206 日齢
東鶏舎 1	2,751 羽	542 日齢
東鶏舎 2	2,789 羽	482 日齢
東鶏舎 3	2,754 羽	401 日齢
東鶏舎 4	2,784 羽	338 日齢
東鶏舎 5	2,847 羽	451 日齢
東鶏舎 6	2,758 羽	423 日齢
大雛舎 1	2,980 羽	96 日齢
大雛舎 2	2,967 羽	110 日齢

(令和 4 年 11 月 13 日現在)

③ 発生確認日

令和 4 年 11 月 13 日

④ 農場見取図



(2) 現地疫学調査実施年月日

令和4年11月13日

(3) 農場の周辺環境・農場概況

- ① 当該農場は周辺を田畑に囲まれており、付近には川が流れていた。
- ② 農場付近において、スズメやハシブトガラスが観察されたが、衛生管理区域内では観察されなかった。
- ③ 農場の周辺には池が複数あり、農場から約2km以内の池にはヒドリガモ389羽、コガモ91羽、マガモ73羽など合計約700羽のカモ類が観察された。
- ④ 当該農場には、成鶏舎及び大雛舎の計2鶏舎があった。成鶏舎は2階部分の通路で繋がっている東西2棟で構成されており、3段のひな段ケージが14列ある高床式の開放鶏舎であった。また大雛舎は2段のひな段ケージが2列ある低床式の開放鶏舎であった。

(4) 通報までの経緯・発生時の状況

- ① 飼養管理者によると、農場全体で平均して1日当たりの死亡鶏は5羽程度が分散して認められる程度であったとのこと。
- ② 発生鶏舎は高床式開放鶏舎の成鶏舎で、11日に列中央付近下段ケージにおいて同一ケージ内の2羽(177日齢)が死亡し、翌日12日に前日死亡鶏が確認されたケージに隣接するケージにおいて計3羽の死亡が確認されたため、家畜保健衛生所に通報したとのこと。
- ③ 当該鶏舎において、産卵数の低下等の異状は認められなかったとのこと。
- ④ 疫学調査時において、発生ケージ付近に衰弱個体が2~3羽確認されたが、その他の鶏に異状は認められなかった。

(5) 管理者及び従業員

- ① 当該農場では作業従事者6名が勤務しており、内訳は鶏の飼養管理業務に従事する正社員3名と、集卵作業のみを行うパート職員3名とのこと。
- ② 飼養管理者は鶏舎ごとの担当は決められていないとのこと。

(6) 農場の飼養衛生管理

- ① 農場入口にはロープのゲートがあり、立入禁止看板が設置されていた。飼養管理者によると、日常的に石灰散布を実施していたとのこと。
- ② 飼養管理者によると、車両が農場に入る際は、農場入口のゲート付近に設置された蓄圧式噴霧器で車両消毒を実施しているとのこと。
- ③ 従業員は出勤後、農場内専用の靴に履きかえ、私服の上に作業着を着用して作業に従事しているとのこと。鶏舎に入る際には、手指消毒を実施しているが、靴や衣服の交換は実施していなかったとのこと。
- ④ 飼養管理者によると、従業員以外の来場者はほとんどいないが、来場者用の農場内専用衣服及び靴を準備しているとのこと。
- ⑤ 発生鶏舎には、1階部分に石灰入りの踏込み槽が設置されていたが、すぐ横の外階段を上がった2階の鶏舎入口には踏込み消毒槽の設置はなかった。
- ⑥ 当該農場は毎月約3,000羽の大雛を導入しており、120日齢で成鶏舎に移動させるとのこと。鶏舎全体でのオールイン・オールアウトは実施せず、毎月列ごとに出荷しており、直近の廃用出荷は1か月以上前とのこと。
- ⑦ 当該農場の鶏舎は自然換気を行っており、必要に応じてファンを使用するとのこと。また、温度調節はカーテンの開閉により実施するとのこと。鶏舎の側面の外側には2×2cm程度の防鳥ネットがあり、破れているところもあった。カーテン内側には3×6cm程度の金網が設置されていた。
- ⑧ 集卵室は成鶏舎の一角に設置されており、鶏舎エリアとの明確な境界はなく、靴や衣類の

交換は行われていなかった。集卵用コンベアは屋内のみを走行しているが、コンベア下の1階天井部分が一部破損し、屋外にむき出しになっていた。

- ⑨ 飼料タンク上部には蓋が設置されており、鶏舎内のラインを通して自動で給餌する構造となっていた。
- ⑩ 飼養鶏への給与水は井戸水を使用しており、消毒等は実施していないとのこと。
- ⑪ 高床式鶏舎の1階部分に堆積した鶏糞は、月に数回重機で搬出し、トラックで農場から約2km離れた自場の堆肥置場に運搬し、コンポストで処理していたとのこと。調査時、鶏舎内の一部分の鶏糞は1.5m程度の高さまで堆積していた。
- ⑫ コンポストと堆肥置場の入口には防鳥カーテンがあったが上部は一部開口していた。堆肥は、近隣の耕種農家に販売しているとのこと。
- ⑬ 飼養管理者によると、健康観察は毎日1回実施しており、死亡鶏は床下に落とし、鶏糞の搬出時に回収していたとのこと。

(7) 野鳥・野生動物対策

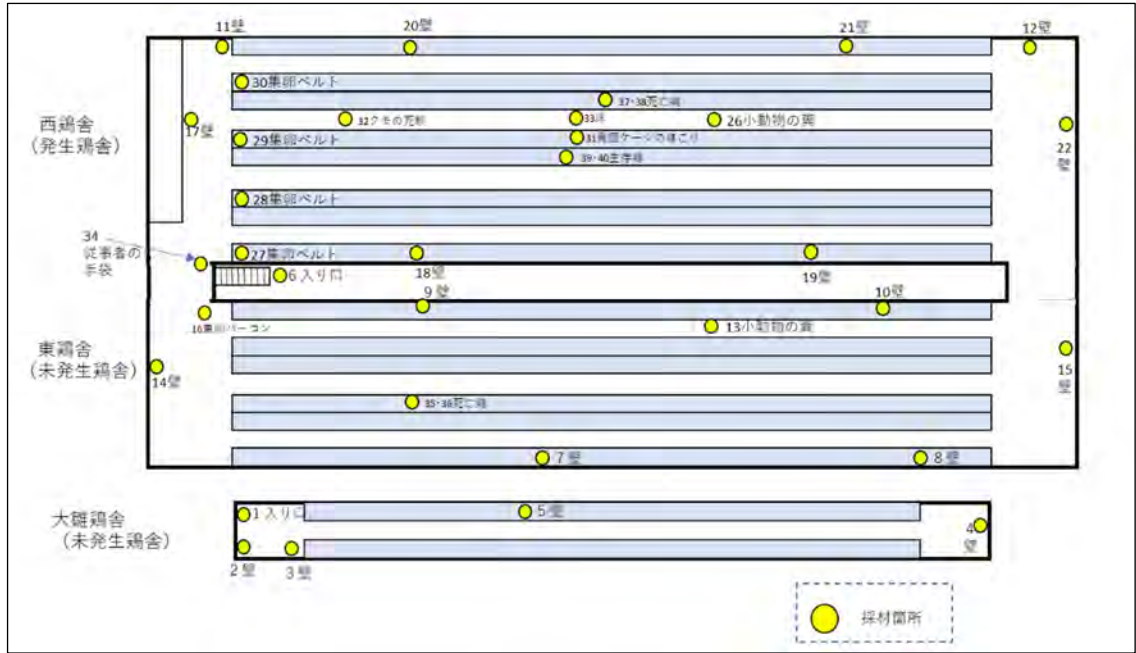
- ① 鶏舎開口部には金網と防鳥ネットが設置されていた。金網に目立った破損は認められず、鶏舎内で野鳥を見かけることはないとのこと。農場周囲ではカラスのほか、シカやキツネを目撃することがあるとのこと。
- ② 農場管理者によると、数年前まではイタチやキツネによって鶏舎1階部分の金網を破壊されることがあったが、2年前に鶏舎壁面下部にトタンを設置して以降は被害がなくなったとのこと。鶏舎開口部や壁に一部隙間や穴が確認された。
- ③ 飼養管理者によると、ネコを鶏舎内で日常的に目撃するとのこと。調査時、鶏舎通路にネコの糞及びネコを複数確認した。また、鶏舎内でネズミを見かけることはほとんどないとのことだが、調査時には鶏舎内でネコがネズミを捕獲する姿が確認された。

(8) 環境サンプル

環境検査材料リスト (全て陰性)

採材場所	採取したサンプル
発生鶏舎 (西鶏舎)	鶏舎壁、発生ケージ通路、集卵ベルト、発生ケージの左右のケージ、発生ケージ付近の床、従事者手袋、気管・クロアスワブ (生鳥、死鳥)、従事者靴底
未発生舎 (東鶏舎)	鶏舎出入口床、鶏舎壁、通路、バーコンベア、気管・クロアスワブ (死鳥)
未発生舎 (大雛舎)	鶏舎出入口床、鶏舎壁

【発生鶏舎及び発生鶏舎以外の採材場所見取り図】



10. 鹿児島県1例目（出水市）の事例

(1) 概要

① 所在地

鹿児島県出水市

② 飼養状況

採卵鶏 約12万羽

鶏舎	飼養羽数	日齢
ウインドウレス鶏舎 <発生鶏舎>	67,789羽	547日齢
開放鶏舎	49,485羽	145日齢

(令和4年11月17日現在)

③ 発生確認日

令和4年11月18日

④ 農場見取図



(2) 現地疫学調査実施年月日

令和4年11月18日

(3) 農場の周辺環境・農場概況

- ① 当該農場は、海岸近くの平野部に位置し、周囲はため池、農業用水路、田畑及び竹林に囲まれている。
- ② 調査時には、当該農場から10mのため池ではカルガモ56羽、オオバン36羽、ヒドリガモ32羽等の水鳥類が多数確認されたほか、サギ類1羽の死体が確認され、約500mのため池でもコガモ115羽、ヒドリガモ32羽等のカモ類が確認された。また、約700mの距離にある川では、ナベヅル14羽等のほか、ツル類1羽の死体も確認された。
- ③ 農場敷地に隣接して牛及び山羊を飼養する畜舎があるが、鶏の衛生管理区域からは除外さ

れており、農場入口の外来車両用の消毒ゲートが共通である以外は、飼養管理の際に動線が交差することはないとのこと。

- ④ 当該農場には開放鶏舎 1 棟とウインドウレス鶏舎（発生鶏舎） 1 棟があり、発生時にはいずれも採卵鶏が飼養されていた。発生鶏舎は 3 階建てのウインドウレス鶏舎で、各階背中合わせの直立 3 段 4 列ケージだった。

(4) 通報までの経緯・発生時の状況

- ① 飼養管理者によると、発生鶏舎（通報時 547 日齢）では、11 月 16 日までの 1 日当たりの死亡羽数は 1～10 程度であったところ、17 日朝に 47 羽が死亡したことから家畜保健衛生所及び系列会社の管理獣医師に同時に通報したとのこと。
- ② 死亡鶏は 1 ケージ 1 羽ずつで 2 羽以上の死亡鶏がいるケージはなく、1 階 10 羽、2 階 20 羽及び 3 階 15 羽で、鶏舎全体に散在していたが、2 階北側列中央部中段にやや多い印象だったとのこと。
- ③ 調査時、1 階は防疫作業が終了していたが、2 階及び 3 階では、通報時に死亡鶏が確認されたケージ付近を中心に多数の死亡鶏が認められ、死亡鶏の一部では肉冠のチアノーゼや眼瞼周囲の浮腫が確認された。

(5) 管理人及び従業員

- ① 当該農場の作業従事者は 6 名で、うち開放鶏舎担当 2 名、ウインドウレス鶏舎担当 2 名及び集卵担当 2 名であり、これに加えてパート従業員 4 名が集卵作業に従事していた。
- ② 飼養管理の担当者は担当鶏舎専属で従事しており、担当以外の鶏舎に立ち入ることはないとのこと。集卵作業については、作業者はそれぞれの担当鶏舎併設の集卵棟で作業していたとのこと。

(6) 農場の飼養衛生管理

- ① 農場の車両出入口には消毒ゲートが設置されており、調査時には撤去されていたが、飼養管理者によると、通常は消毒ゲートの更に奥（農場側）にロープを設置していたとのこと。
- ② 飼養管理者によると、日常的に衛生管理区域に立ち入る車両は飼料輸送車両及び集卵車両のみで、電気工事業者等の立入りがまれにあるとのこと。
- ③ 衛生管理区域入口にある倉庫棟が従業員出入口として使用され、倉庫棟で靴の履き替えを行っていた。衛生管理区域の周囲は柵等の境界は設置されていなかった。
- ④ 飼養管理者によると、鶏舎周囲は石灰散布による消毒を数週間～1 か月に 1 回程度又は降雨後に行っているとのこと。
- ⑤ 飼養管理者によると、従業員は衛生管理区域に入る際、倉庫棟で衛生管理区域専用長靴に履き替え、各鶏舎に併設する集卵棟で衛生管理区域専用作業着に更衣していたとのこと。飼料運搬業者及び集卵業者は、衛生管理区域専用作業着及び長靴を持参し着用しているとのこと。また消毒用スプレーを持参し、手指や長靴の消毒を実施しているとのこと。
- ⑥ 飼養管理者によると、従業員が鶏舎に入る際は、鶏舎前室に設置された踏込み消毒槽で衛生管理区域専用長靴を消毒してから鶏舎専用長靴へ履き替え、鶏舎専用作業着及び手袋を着用し手指消毒を実施した後、鶏舎内で踏込み消毒及び全身噴霧消毒を実施していたとのこと。発生鶏舎においては、前室にはすのこを設置していたが、動線上ではなく動線の脇に設置されていたため、動線が交差していた可能性が否定できない。また、前室と鶏舎内の踏込み消毒はどちらも逆性石けんを使用していたが、希釈倍率及び交換頻度は定めておらず、消毒液は 2～3 日して汚れたら交換していたとのこと。
- ⑦ 吸排気は自動制御で、鶏舎側面の 3 階上部にある吸気口から外気を取り込み、鶏舎奥側全面に設置した換気扇から排気していた。吸気口の外側には 1.5cm×10cm 程度の金網、排気用の換気扇の外側には換気扇が停止すると自動で閉鎖するシャッターが設置されていた。
- ⑧ 鶏舎外壁のクーリングパッドで鳥による損壊部分の補修が認められたほかには、鶏舎外部・内部ともに目立った破損は認められなかった。
- ⑨ 鶏舎横の飼料タンク上部には蓋が設置されており、鶏舎内のラインを通じて自動給餌を行

っていた。

- ⑩ 飼養鶏への給与水は、井戸水を利用しており、各鶏舎内のタンクに一時貯水され、次亜塩素酸による消毒を実施した上で、鶏舎内のラインを通じて自動給水を行っていた。
- ⑪ 鶏舎ごとにオールイン・オールアウトを実施しており、オールアウト後は鶏舎内の洗浄・消毒を行い、その後の空舎期間は45日程度設けていたとのこと。
- ⑫ 発生鶏舎の集卵バーコンベアーの外部への出口は3階にあり、開口部は蓋で塞がれており、蓋は集卵時に自動で開き、集卵ベルト停止後は手動で閉めるとのこと。
- ⑬ 発生鶏舎の除糞は週2回、除糞ベルトにより隣接の堆肥舎まで運搬している。除糞ベルトの鶏舎外への出口は、除糞作業時以外は閉鎖板により閉鎖されていた。堆肥舎側面上部の通気のための空間は約2cm四方の防鳥ネットで覆われていた。
- ⑭ 飼養管理者によると、毎日の飼養管理時に回収した死亡鶏は、倉庫内の死亡鶏一時保管用ポリタンクに收容し、毎日の作業終了後、各鶏舎の担当者がそれぞれ別々に軽トラックに乗せて共同死鳥保管庫へ搬出しており、その後軽トラックで衛生管理区域内に戻ることはないとのこと。
- ⑮ 管理獣医師は、直近では10月7日に強制換羽後の確認のために訪問していたとのこと。

(7) 野鳥・野生動物対策

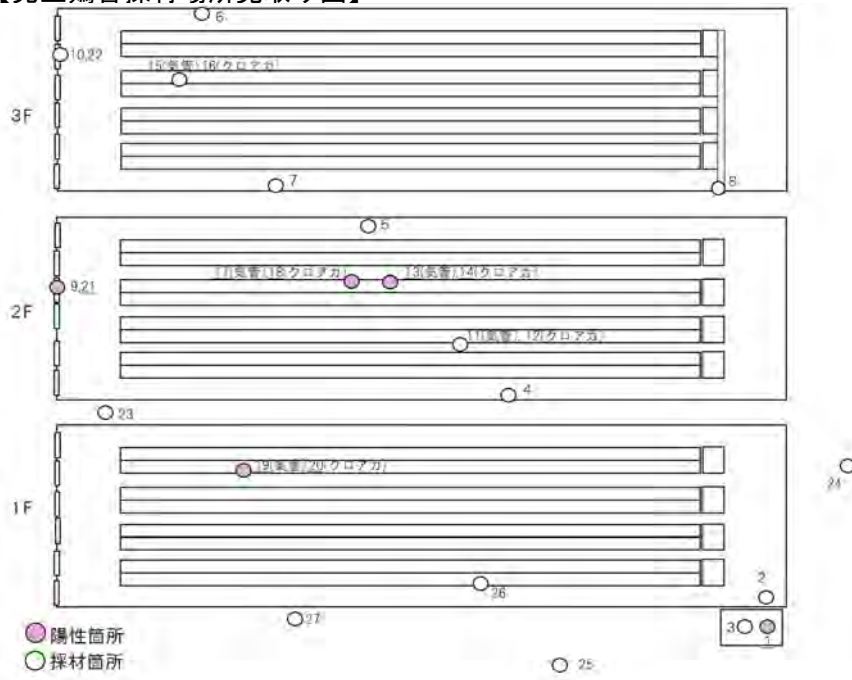
- ① 飼養管理者によると、農場敷地内においてカラス、スズメ等の野鳥のほか、ネコを見かけることもあるとのこと。調査時、農場敷地内でネコのものと思われる糞が認められた。
- ② 飼養管理者によると、鶏舎内でネズミを見かけたことはなく、粘着シートや殺鼠剤の設置を実施しているものの、ネズミの死体を見たことはないとのこと。調査時、ネズミの死骸、ネズミによるかじり跡、糞及び足跡はいずれも認められなかった。
- ③ 調査中、農場敷地内でカラスを確認、農場上空をツル類が飛行しているのが見られた。飼養管理者によると、野鳥の糞が農場敷地内で見られることから、週2回逆性石けんで敷地内の路面を消毒しているとのこと。

(8) 環境サンプル

環境検査材料リスト（下線部はウイルスが検出された検体）

採材場所	採取したサンプル
発生鶏舎 (ウインドウレス鶏舎)	長靴底①, 前室床②, 作業用手袋③, 壁④～⑦, 集卵ベルト⑧, 換気扇⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲, 死亡鶏(気管スワブ⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲), クロアカスワブ⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲, 軟卵⑳
鶏舎周囲	野鳥糞便㉓～㉕, 水生昆虫㉗, ネコの糞㉘
農場周辺	水㉙

【発生鶏舎採材場見取り図】



【発生鶏舎以外の採材場所】

